

## 白羽の矢の周辺

伊海孝充

矢立台は、能《賀茂》を象徴する作り物である。四角柱の台に紙垂を付け、垂直に矢を刺す形態は、江戸時代初期の絵図にも見られるが、下間少進『舞台之図』の図は「壇を築き土を盛って祭壇を作る」(新潮日本古典文学集成『謡曲集』一九八八年)という描写とおり、四角柱ではなく塚型をしているので、形状には時代ごとに変化があった。ただし、最も重要な「矢」を際立たせた作り物である点に変わりはない。

この矢の由来には聊か問題がある。矢について語る賀茂縁起は『釈日本紀』所引『山城国風土記』逸文がよく知られている。玉依日売は石川の瀬見の小川に流れてきた丹塗矢を家の床に刺しておく懐妊し、男子を生んだ。その子が別雷命、矢が乙訓郡社坐火雷神、玉依日売とその外祖父・母が蓼倉里三井社坐である、という物語である。対して、より《賀茂》の話柄に近似する『本朝月令』所引「秦氏本系帳」では、秦氏女子が葛野川で得た一本の矢を家の戸上に刺しておく懐妊して男子を生み、その子が別雷命、女子が御祖神、矢が松尾明神となる、という物語になっている。両

者を比べると、細部に多くの差異があるが、本稿では、前者が矢を「丹塗矢」とするのに対して、後者が単に「矢」とする点に注目したい。後述の丹塗矢伝説を踏まえると、この矢は男根の隠喩なので、本来は丹塗矢とあるべきだが、なぜ「秦氏本系帳」はただの矢としているのだろうか。

丹塗矢の背後には蛇の姿が揺曳している。他の日本神話の中で丹塗矢が登場する話には、『古事記』神武記に見える天皇の皇后選び譚があるが、大后の比売多々良伊須氣余理比売の出自の述べる中で次の話が語られる。三島の湊咋の娘、勢夜陀多良比売を見初めた「美和山」の大物主神は、比売が「大便らむと為し時」に、丹塗矢と化し、比売の陰部を突く。比売はその矢を床のそばに置いておくと、矢が麗しい丈夫となり、比売を娶り、間に生まれたのが伊須氣余理比売である、という話である。福岡県西区拾六町ツイジ遺跡から女性器に矢が刺さったような線刻画が発見されているように、この物語は古代の農耕儀礼と関係があり、女性が身籠る性の力が稲の

実りと重ねられている(益田勝実『古事記』岩波書店、一九八四年。坂本勝『都市の大物主』『日本文学誌要』八三号、二〇一一年三月)。

大物主神の神話としてよく知られているのは三輪山神話であるが、この話で大物主神は蛇体として登場する。大物主神が農耕神としての性格があること、蛇の旺盛な生命力と重ねられていることは神話研究で指摘されている(三谷栄一『日本神話の基盤』瑞書房、一九七四年、蛇が水の神・農耕の神の化身(もしくははそのもの)であり、雷神とも重ねられていることは広く知られている。こうした大物主神の神話と丹塗矢との関係を踏まえると、賀茂縁起のそれも、同様の信仰が投影されていることが容易に想像される。すなわち、賀茂縁起の丹塗矢にも生命力に溢れる性とそれに重ねられる稲の実りの源が込められているのである。その丹塗矢を、秦氏系の賀茂縁起はなぜ描かなかったのか、その意図は判然としない。古代神話のもつグロテスクを和らげたいという意図が働いたのかもしれないが、その一因は丹塗矢説話が蛇と関係が深いことにもあったのではないだろうか。

『日本霊異記』中巻「力ある女の力拵べを試みし縁 第四」は道場法師の子孫の女と美濃狐の子孫の女が力競べをし、前者が後者を完膚なきまで打ちのめす話であるが、道場法師は雷神の子で、頭に蛇をのせ誕生したことはよく知られている。また美濃狐については『日本霊異記』上巻一二にあり、この狐女房型

の物語は稲作儀礼を反映していることが指摘されている(長野一雄『古代説話の文学的研究』井関書店、一九八六年)。つまり先の物語は、古代の農耕信仰の中で蛇が狐より有利にあったことを示しているのである(中村慎里『日本人の動物観』海鳴社、一九八四年)。そして、本稿において重要なのは、この両者の力関係は、時代が下ることに逆転し、稲荷信仰が隆盛を極めるうちに、蛇と農耕信仰の関係が希薄化していくことである(中村前掲書)。

秦氏系の賀茂縁起から丹塗矢が消去された一因に、こうした農耕信仰の変化があるのでないだろうか。「丹塗矢」には大物主神の大選び譚のイメージが色濃く投影されているので、「丹塗矢」を「矢」とするだけで、この縁起から農耕神の化身として力を失っていった蛇の姿を臆ろげにすることができらるだろう。さらに、蛇に代わって農耕信仰の中心となるのが狐(稲荷)であり、その稲荷信仰と秦氏が密接な関係がある、というのは偶然だろうか。想像力を逞しくすれば、矢の描写の変化には、単なる農耕信仰の変遷だけでなく、農耕儀礼における秦氏の信仰・嗜好が色濃く反映されているのではないだろうか。

さらに問題は残る。それは、能(賀茂)がこの矢を「白羽の矢」としている点である。このことについては、「やたけの人の 治めん 御代を告げしらはの やほよろづよの末まで」などから將軍の治世を寿ぐ寓意を読み解く指摘もあるが(能を読む③『元雅と禪竹』角川書

店、二〇一三年)、矢から無理に脇能の治世祝福の意図を導く必要はないだろう。また、『賀茂』の三所祭神説に一致する記述をもつ『神道雑々集』と同じ天台系口伝資料には、松尾明神が女に白羽の矢を与えること記すものもあるが(前掲『謡曲集』解題)、物語の展開に差異があり、これが直接的典拠であるとも定め難い。こうした文化環境に賀茂縁起の矢を「白羽の矢」とする言説が広く流布し、『賀茂』の作者と考えられる金春禪竹がそれを典拠にした可能性はあるだろうが、そもそも白羽の矢は神告として出現することがある『満濟准后日記』永享五年(一四三三)二月九日今日八幡御社参之処。於馬場白羽箭一手御拾。など。禪竹がなぜ「白羽の矢」としたのかという問題の明確な答えにはならないが、白羽の矢が丹塗矢に置き換わったとしてもそれほど不自然ではないだろう。

ただし、少々気になる記事がある。それが『申楽聞書』の物部守屋討伐譚である。これは室町時代末期に大森彦介が金十蔵に伝えたという書であるが、金春系の伝承を多分に含んでいることで知られる。その中の聖徳太子と秦河勝が守屋を討伐する場面を次のように記している。

此時守屋ハ、ほけ経のよろひかぶとをき、  
稲蔵が城の上より、太子を討申さむと申  
て悦なし、処ニ、天より白羽の矢三筋太子  
子の御前へふり来る。太子ふしぎに思召、  
二筋ハ太子、一筋を百川勝もちて待所ニ、  
是をバ夢ニも知で悪口申処を、太子も川

勝も一度ニ放矢が、守屋大臣が口へゐる  
めされ、則守屋めつす。

(能楽資料集成、細川五部伝書)

聖徳太子伝は古くは『日本書紀』に見えるが、中世には多様なテキストへ展開する。中世太子伝研究によると、それらは押しなべて太子が迹見赤禰に命じて守屋を射殺すという内容(太子自身が射る資料もある)で、またその矢は「四天王矢」や「鏑矢」と記されており(松本真輔『聖徳太子伝と合戦譚』勉誠出版、二〇〇七年)、天から授かった白羽の矢を太子と河勝が射るという話は見当たらない。このように同じ金春座に関わる作品・文献、そしてともに秦氏に関する記述で「白羽の矢」が見られる点に注意せられる。もちろん、直接的な影響関係を言いたいわけではないが、この白羽の矢は金春座で秦氏の伝承を語る上で好ましいモチーフであったのかもしれない。

以上、白羽の矢について、二つの面から正鵠を射ない考察を記したが、そもそも『賀茂』の前場は川尽しのロンギをはじめ、「白」を基調とした美しい詞章で構成される。その世界観と白羽の矢が絶妙に調和していることも念頭に置く必要があるが、その白の世界は単に美しいだけでは十分ではない。その内に田植への歓喜・雷神の出現を導くだけのエネルギーを満たしておく必要がある。白の色の下に隠されている農耕儀礼の生気に思いを巡らすことも意味があるのではないだろうか。

(法政大学教授)